様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０７３０１１０
研究課題名（和文）　大正知識人の中国政治体制論と中国観の研究

研究課題名（英文）　Perspectives on the Chinese Political Regime on Taisho Period

研究代表者
鈴木　隆（SUZUKI TAKASHI）
（財）平和・安全保障研究所、客員研究員
研究者番号：50446605

研究成果の概要（和文）：(1) 袁世凱帝制をめぐる日本・米国・中国の主な知識人の論争の相関関係と、その初歩的な見取り図の提示を可能とした。(2)上記の分析を通じて得られた当時の日米中三カ国の研究者らによる中国政治論と、今日の中国政治・政治体制論との間にみられる、歴史的に共有された認識枠組みを解明した。これについては、政治的支配と「民主」の問題をめぐる、近現代中国の歴史的連続性として捉えることができる。

研究成果の概要（英文）：Main conclusions through this reseach are; (1)acquirement of more detail information and knowledge about the controversy over the Chinese political regime in Japan, the United States and China in 1910's; (2)these disputes had very insightful considerations and are, to some extent, applicable to thinking about China's political trends at present and in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	400,000	120,000	520,000
２００９年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総　計	700,000	210,000	910,000

研究分野：
科研費の分科・細目：政治学・政治学
キーワード：中国、政治体制、政治体制論

１．研究開始当初の背景

本研究は、とくに大正初年間に日本・米国・中国の知識人が展開した中国の政治体制をめぐる言説の諸相を、政治学的手法で分析することを通じて、中国政治における民主と独裁をめぐる思惟の特徴、発展途上国の国民国家建設における政治的権威の形成、日米両国の中国観の特質といった政治学・歴史学上の課題に対する学問的貢献を目的とする。

そこで具体的に取り上げる分析事例は、1911 年の辛亥革命から袁世凱の帝制が実施された 16 年頃までを時期的対象とし、帝制に関する日本の論壇状況を再構成する。

周知のように、1915 年夏頃に公然化した袁世凱の帝制運動は、護国戦争による阻止行動と翌年１月以降の帝制施行を経て、16 年 3

月には、その取消しが宣言された。この一連の政治過程は帝制失敗の憂悶の内に袁が死去した劇的な結末とも相俟って、近代中国の政治史において重要な研究テーマであった。それは辛亥革命以来の政治過程に１つの区切りをつけ、後の「軍閥混戦」と新文化運動へと続く中国近代史上の一大転回点だったのである。

また、帝制運動開始の契機が、米国政治学会初代会長で著名な政治・行政学者のグッドナウ（Frank Johnson Goodnow）が発表した「学術」論文であったことは、中国のみならず、日米両国の学界において様々な波紋を呼んだ。折しも大正デモクラシーの胎動期にあった日本でも、多くの東洋史学者と政治学者、ジャーナリストらによってグッドナウへの賛否両論が続出し、活況あふれる論争状況が展開された。それらの主張の中には、袁世凱の独裁に対する個人的感情を越えて、論争参加者の培ってきた学問的背景と辛亥革命以来の中国の政治発展に関する深い洞察に基づく論考も多く見られたのである。

２．研究の目的

(1)帝制と集権体制についての多様な政治認識の諸相、政治的思惟の再検討

袁世凱の帝制に関しては、中国近代政治史と軍事史の方面で既に古典的な業績が存在する（Ernest P. Young, *The Presidency of Yuan Shih-kai*, University of Michigan Press, 1977. J・チェン著『袁世凱と近代中国』岩波書店、1980 年など）。

近年では日本でも、従来の党派史観を離れて袁の帝制を再評価する研究が散見される。しかし、本研究のように政治学的観点から帝制論を正面から分析したものは今日までごく少数にとどまる（山田辰雄「袁世凱の政治と帝制論」、宇野重昭・天児慧編『20 世紀の中国』東京大学出版会、1994 年。横山宏章『孫文と袁世凱』岩波書店、1996 年）。

また、上述のように、同時代の日米中三カ国の知識人たちの議論には、儒教的伝統の連続と断絶、明治維新と辛亥革命の比較革命史、ナショナリズムと民主主義の関係性など、より多様な視点に基づく豊かな中国認識が展開されていた。それらはまた、現代中国の集権的政治体制に関する思惟の特徴を把握し、中国政治の将来を展望する上でも、きわめて有益な論点と視角を提供している。

(2) 異なる視点からの辛亥革命論、帝制をめぐる国際的な論争状況とその相互関係の総合的提示

近年、日本政治思想史の分野では、学術史的回顧も含めた近代日本の中国・アジア観の再検討を目指す研究が盛んである（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』新版、緑蔭書房、1996 年。山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、2001 年。子安宣邦『アジアはどう語られてきたか』藤原書店、2003 年など）。

同様に、個々の政治思想家に関する中国観の発展についても、とりわけ辛亥革命論に関しては枚挙に暇が無い。しかしそこには次のような問題点を指摘できる。第１に、時期的対象が 1911 年の辛亥革命勃発の前後に偏しており、中国研究における上記の成果を十分に踏まえて袁の帝制を正面から分析したものは数少ない。本研究では、同時代の人々の問題意識に沿いつつ、革命の勃発という「事の始まり」にではなく、むしろ彼らがある種の「事の終わり」を予期した時点でいかに革命過程の総括を行なったのかに注目する。その意味において、袁の帝制論を分析することは異なる角度からの辛亥革命論にほかならない。

第２の論点として、先行研究の多くは、北一輝や吉野作造、内藤湖南などの著名な人物に対象を限定した上で、それら個々の中国観の発展を時系列的に論じたものがほとんどといっても過言ではない。本研究のように、特定の政治的イッシューについて、同時代の日本や米国、中国の論壇状況を総合的に提示し、比較研究の枠組みの中で日本や米国の中国観の特質を追究しようとする研究はきわめて稀である。

３．研究の方法

上記のごとき、中国の政治状況と日本の論壇状況を踏まえつつ、米国と中国の知識人による中国の政治体制論、政治社会論を俎上に載せることで、それらを比較検討する。

４．研究成果

研究成果の概要は、以下の通りである。

(1) 袁世凱帝制をめぐる日本・米国・中国の主な知識人の論争の相関関係と、その初歩的な見取り図の提示を可能とした。

上記３カ国の論争参加者は、概ね、イ）帝制賛成、ロ）帝制反対・集権賛成、ハ）帝制反対、の３つの政治的立場に分類される。また、それぞれの論拠としては、以下のごとき様々な観点や立論がみられた。

《日本》

①儒教的伝統をめぐる連続と断絶

〔根津　一〕

・イ）
　儒教倫理の再活性化を目的とする君主政体復活を企図

・その背景認識として、大逆事件と大正デモクラシーへの危機意識

・日中両国の「東洋」的紐帯である儒教への無理解について、根津自身が帝制論者でありながら、グッドナウを名指しで批判

〔白鳥　庫吉〕
・イ）とロ）の間での認識の揺れ
・袁世凱の独裁支持
・ただし、儒教的「中華」世界観からの断絶と、国民形成のための集権体制の必要を強調

〔副島　義一〕
・ハ)
・辛亥革命以前は、立憲君主制支持。その後共和制支持へと転換
・グッドナウを名指しで批判
・儒教の君主主義と、共和制民主主義の両方の正当化言説の便宜的選択

②辛亥革命と明治維新の比較革命史
〔山路　愛山〕
・イ)
・国民国家形成における集権体制の確立と、その下での政治的権威の醸成の必要性を重視
・明治維新との共通性の認識に基づく、民族／エスニック意識に対するネーション的課題の優先を強調

〔北　一輝〕
・ハ)
・グッドナウを名指しで批判
・結果としての、ネーション統合に対する民族／エスニック意識の優先
・日本の「東洋的君主制」と中国の「東洋的共和制」との同一視
・独裁による「積極的自由」の実現

③欧米政治史との比較における民主主義とナショナリズムの関係性
〔浮田　和民〕
・イ)
・西洋政治史、憲政発展からの帰納的考察
・中国における共和制的民主主義発展の条件を悲観（国民の文化・教育・生活水準等
・中国史における絶対王政と近代国家形成における集権プロセスを経た後の民主化の展望
・現段階における袁世凱の独裁支持

〔吉野　作造〕
・イ）とハ）との間で認識の揺れ
・欧米と中南米、中国との共和制的民主主義の比較考察
・中国における共和制的民主主義発展の条件を悲観（国民の文化・教育・生活水準等)、「憲政の本義」論文での指摘
・当初は袁世凱の独裁を是認、後に悲観。中国における集権と民主の両方の実現可能性について悲観（1916 年 1 月時点)。

〔大山　郁夫〕
・ハ)
・グッドナウを名指しで批判
・日本の大正デモクラシー状況への洞察に基づく中国政治の将来展望
・列強の外圧を退けるための中国ナショナリズムの喚起、政治家の倫理と国民的一体感の醸成
・民主化に基づく下からの国民統合と、行政部を中心とする政治機関の上からの権力集中の結合の必要性を強調

《米国》
〔F・J・グッドナウ〕
〔P・S・ラインシュ〕
・イ）ないしロ）
・袁世凱の独裁支持
・中国独自の政治発展のコースを主張し、欧米民主主義の中国への直接的適用を批判
・当面の中国政治の安定と将来的な民主化の展望、集権と民主のゼロサム関係を自覚
・認識枠組みとしての米国政治学の新潮流
・革新主義時代米国の行政国家化を背景とした大統領集権化の推進

《中国》
〔楊度〕
・立憲君主制による中国政治の安定
・グッドナウを賞賛

〔梁啓超〕〔汪鳳瀛〕
・ロ)
・グッドナウを名指しで批判
・共和制の現状維持による無用な政治的混乱の回避を重視
・同時に、「開明専制」への共感

〔胡適〕
・中国の共和制的民主主義の発展を確信
・当時、米国留学中で、米国政治と政治学の新潮流を、大統領選挙などの観察を通じて実感として体得
・グッドナウの帝制論の立論のありかたは、彼の言葉とは裏腹に、実はその革新主義的政治学の引き写しに過ぎないと批判

(2)上記の分析を通じて得られた、日米中三カ国の研究者らによる、今日の中国政治とその体制論にみられる、歴史的に共有された認識枠組みを解明した。これについては、政治的支配と「民主」の問題をめぐる、近現代中国の歴史的連続性として捉えることができる。

なお、以上については現在、これらの考察を総合的に提示するための、論文公刊に向けて取り組んでいる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①鈴木隆、根津一の中国論点描、国際情勢・季報、査読無、第 77 号、2007 年 2 月、63～75 頁。
②鈴木隆、中国共産党の支配と「民主」、アジア政経学会・平成 20 年全国大会提出論文、査読無、2008 年 10 月。
〔学会発表〕（計 3 件）
①鈴木隆、口頭報告、中国共産党の支配と「民主」、アジア政経学会・全国大会、分科会「中国の政治と外交」、於神戸学院大学、2008 年 10 月。
②鈴木隆、口頭報告、中国の政治体制と政治体制論をめぐる最近の動向、科学研究費補助金プロジェクト（基盤研究Ａ）「中国共産党に関する政治社会学的研究」、於法政大学、2008 年 12 月。
③鈴木隆、口頭報告、中国共産党の支配と「民主」、大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」、地域研究推進事業・現代中国地域研究、「中国の政治的ガバナンス」研究セミナー報告、於慶応義塾大学、2009 年 1 月。

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　隆（SUZUKI TAKASHI）
（財）平和・安全保障研究所、客員研究員
研究者番号：50446605

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：